

言葉と鳥

湯本 香樹実

人間の脳の生み出したものでもっとも画期的なもの？ といえ
ば、それは言葉だろう。サルやイルカやヨウムなど、人間以外の動物
の言語能力についても研究されているが、人間が抜きんでているとい
う点では議論の余地はあるまい。

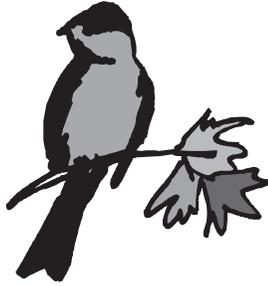
もうひとつ、言葉ほどではないにしろ人間の脳のユニークな産物に、
お金がある。これは以前に読んだ本の受け売りだが、人間の脳という
のは、脳内に送られてきたある信号を別の信号に置き換えてまた送り
出したり、ようするに置き換えを得意とする装置であり、物の価値を
置き換える貨幣というシステムは、きわめて「脳的」なのだそうだ。

言葉とお金。もし言葉がなかったら、医者に行っておなかのどこが
どう痛いかな、詳細にうったえることもできない。お金がこの世に存在
しなかったら、少くとも私が遠い国の海でとれたマグロを口にするこ
となど不可能だろう。

しかしお金と言葉の決定的な違いは、一方が置き換えのために存在
するのに対して、もう一方は他の物と置き換えがきかない、というこ
とだ。もちろん言葉だって、ある状況や心の有り様を、言葉というも
のによって「置き換えている」ともいえるし、言葉がそれそのものだ
けで、他と切り離されて存在しているわけではない。が、言葉をお金
のように物や労働力と交換することはできない。

それをいちばん身にしみて感じるのは、言葉によって人を傷つけて
しまったときではないだろうか。償うために物やお金を差し出すのも
いいだろう。何か労働するとか、行いによって謝る気持ちを表すのも、
とてもよいことだと思う。だがそれだけでは、かんじんの言葉は生き
残っている。

昔読んだ本の中に、「言葉と鳥は似ている。どちらも一度逃がしたら、
捕らえることはできない」という箴言のようなものがあって、本はど



こへ行つたか見つからなくなつてしまつたが、ずっと心に残つてい
たぶん秘密を守ることの難しさをいつたものなのだろうけれど、言葉
がひじょうに独特で、ときに扱いが難しいものであることをたとえて
いるとも私にはとれるのである。

言葉というものは一度口にしてしまつたら、いくら消してしまいた
いと悔やんでも、なかなかまならない。それが人を傷つけるような
悪しき言葉ならなおさらだ。何度も生々しく甦り、気まぐれな鳥のよ
うに現れては、心を鋭いくちばしで突き刺す。その言葉によつて傷つ
いた人ばかりでなく、口にした人をも、本人さえ気づかぬうちに貶め、
蝕んでいる。言葉というものの不思議で、はかりしれないのはそうい
うところだ。人間の生み出したものなのに、別の生き物のような、そ
れも鳥のようにもつと天上の世界に近いような、あるいは深い闇の世
界に繋がっているような。

それでは逃げた鳥を捕まえる網はないのだろうか？ もちろん、あ
る。それは言葉だ。言葉を購入するのは、言葉しかない。

あたりまえのことだが、言葉による何かを償いたいのなら、行いな
り物品だけでもませることはできない。だがどんな残酷な言葉をも鎮
める言葉は、必ずある。それもまた、言葉の持つはかりしれない力だ
ある。

イギリス人の知人が、あるとき子供にこう教えていた。言葉は魂の
もつとも物質的な顕れだ、と。そういうえば、人の魂もよく鳥にたとえ
られる。たぶん私たちの魂は、自分で思っているよりずっと野生のも
のであり、飼い慣らすことの難しい、自由を好む、翼を持った生き物
に近いのだろう。人間は、言葉を交わす。魂を交わす。心のなかに飼つ
ている一羽の鳥を、伝書鳩のように行き交わせながら、私たちはこの
世界で生きている。

ゆもと かずみ 東京生まれ。著書に『夏の庭』
(新潮文庫・徳間書店)、『ポプラの秋』(新潮文
庫)、『西日の町』(文春文庫)など。近著に『魔
女と森の友だち』(理論社 絵・ささめやゆき)。